

中期モンゴル語の/h/について

中村雅之

1. ウイグル文字における/h/の不可解さ

中期モンゴル語に/h/という音素があったことは広く認められている。13～14世紀のパスパ文字モンゴル語や漢字音写モンゴル語に、/hon/(年)、/harban/(十)、/hüker～hüger/(牛)などと解すべき語形が確認できる。しかし、ウイグル文字モンゴル語においては、これらの/h/は一切表記されない。/on/、/arban/、/üker/としか読めない綴りになっている。古典期文語の表記においては勿論のこと、13～14世紀においても、パスパ文字や漢字音写の/h/に相当する部分はウイグル文字モンゴル語ではゼロ表記である。

この事実は十分な検討に値すると思われるが、一般にはあまり問題にされないようである。つまり、モンゴル語を表記し始めた13世紀のウイグル文字では、モンゴル語の/h/を表すのに適当な文字がなかったためにゼロ表記になったと解釈されている。しかし、一般に表音文字において、文字として表記されても発音されない例は数多くあるが(仏語や西語の「h」など)、明瞭に発音される子音が文字として表記されない例はほとんどない。とりわけ、ウイグル文字モンゴル語においては、ウイグル語からの借用語彙(tngri<天>やjrly<聖旨>など)を除けば、/h/以外の音素はすべて表記される。一つの文字が複数の音素に対応することはあっても、/h/以外の音素がゼロ表記になることはない。なぜ/h/だけが例外なのであろうか。

2. 漢字音を表記したウイグル文字

モンゴル語の/h/はウイグル文字ではゼロ表記であるが、漢語語彙の場合は全く事情が異なる。ウイグル文字モンゴル語碑文の中に頻繁に見える漢語語彙においては、漢語の/h/はゼロ表記になることはなく、「q」または「k」で表記されている。以下に例を挙げる。(矢印の後がウイグル文字表記。転写はリゲティ1972による。)

「喜(/hi/)」→「qi」、「河(/hə/)」→「qo～qoo」、「興・行(/hiŋ/)」→「qing」、
「翰(/han/)」→「qan」、「戸・護(/hu/)」→「qu～quu」、「学(/hio/)」→「qio」、
「学(/hiau/)」→「keu」、「徽(/huoi/)」→「kui～qui」、「許(/hiu/)」→「kkü」、
「賢(/hien/)」→「ken」、「洪(/huŋ/)」→「kung」など

このように漢語の/h/には「q」か「k」が充てられ、モンゴル語の/h/がゼロ表記である

のと著しい対照を示す。

なぜモンゴル語と漢語語彙とで/h/の表記が異なるのか。次の二つの仮説が可能である。

- ①漢語の/h/は[x]であったのに対して、モンゴル語の/h/は[h]で、音価が異なっており、[x]を「q/k」で表記し、[h]をゼロ表記とした。
- ②モンゴル語の/h/は、ウイグル文字表記の元になった方言では既にその音価を失って、(後のモンゴル語と同様に)ゼロ子音になっていた。(この場合の「方言」は必ずしも地理的なものを意味しない。階層・職業など社会的方言を含む。)

このうち、①の仮説は他の表記を勘案した場合、やや説得力に欠ける。まずパスパ文字の「h」はモンゴル語の/h/を表記するだけでなく、漢語の/h/をも表記しており、二者を区別していない。また漢字音写においても、モンゴル語の/h/は漢語の/h/で表記されており、二つの/h/は対応するものとして扱われている。つまり、ウイグル文字でのみモンゴル語の/h/と漢語の/h/を区別したと考える根拠がないのである。その上、漢語語彙はあくまでもモンゴル語の一部として記録されているのであるから、モンゴル語の/h/と漢語語彙の/h/を区別するということは、モンゴル語内部に/h/と/x/の二つの摩擦音を区別することになるが、そのような言語は相当に稀であろう。

3. 「q」の音価

モンゴル語の/h/の問題は「q」で転写される子音の音価と密接に関わっている。「q」の音価は、はじめは破裂音の[q]であったが、やがて摩擦化して[χ]になった。吉池孝一(2003)でも指摘されているように、まず/h/がゼロとなる変化が終息した後に、[q]が摩擦化したと考えなければならない。換言すれば、ある時点において[q]が摩擦化しているとすれば、元の/h/はすでにゼロになっていたということである。

13～14世紀のウイグル文字モンゴル語碑文における漢語語彙の表記から見る限り、「q」で記される子音が摩擦音であった(もしくは異音として摩擦音も用いられていた)可能性は十分にある。溪母(/k'/)の「軽・卿(/k'in/)」が「kin」で表記されるのに対して、曉母・匣母(/h/)の「興・行(/hin/)」が「qing」で表記されるのは、「q」が摩擦化していたからだと考えると都合がよい。ただし、「洪(/hun/)」が「kung」となるなど例外もあり、漢語語彙の表記だけから判断するには限界がある。

吉池(2003)によれば、15世紀に成ったと思われる『韃靼館雜字』では、「q」はすでに摩擦化しており、語頭の/h/は少なくとも男性母音に前接するものについて、すでにゼロになっていたという。このような状況を13世紀のウイグル文字モンゴル語の基づい

た方言にも想定することは不可能であろうか。

4. まとめ

現段階においては、ウイグル文字モンゴル語で/h/が表記されない理由について、明確な解答を提出することはできない。ただ、13世紀にモンゴル語のウイグル文字表記がなされた時、その基づいた方言に/h/がなかった可能性を指摘するに留めておく。そのような“方言”については、単なる妄想としてではあるが、次のような可能性が考えられる。

一般的な口語モンゴル語では一貫して/h/がなかったが、口承文芸や芸能などにおいて守られた伝統音としては/h/があった。ウイグル文字は口語音によったが、パスパ文字や漢字音写は伝統音によった。類似の例は漢語における尖団の区別に見られる。/tsi/と/tei/の区別は京劇で行われ、満洲文字やラテン化新文字でも表記し分けられたが、北京口語では(18世紀初頭以降には)一貫して区別がなかった(/tei/に合流)。伝統音は予想以上にかたくなに保持されることがある。

参考文献:

- Ligeti, Louis (1972), *Monuments Préclassiques 1*, Budapest.
吉池孝一(2003)「韃靼館雑字のh-について」『KOTONOHA』4.